

第21回 一度は消えた「手ぶくろを買いに」

新美南吉記念館で開催中の特別展「教科書で出会ったごん」（10月23日まで）から、南吉作品の教材化の歴史をご紹介する最終回。今回は、「ごんぎつね」と並んで数多くの教科書に掲載されてきた「手ぶくろを買いに」についてご紹介します。

「手ぶくろを買いに」が初めて小学校3年生用の国語教科書に採用されたのは、「ごんぎつね」よりも2年早い昭和29年でした。初めての体験という子どもに興味をそそるモチーフ。はつきりとした山場のあるストーリー。雪景色や夜の情景描写の美しさ。人間を恐れる母ぎつねと好奇心旺盛な子ぎつね、きつねと人間という人物対比。「手ぶくろを買いに」は、幼児期の延長ともいえる低学年から脱した3年生が物

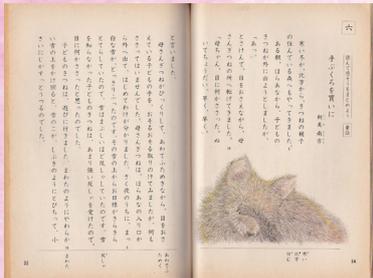
語を読み取り、味わう文学教材として実に適しています。一時は3社が採用する人気教材でしたが、平成14年の改訂ですべての教科書から消えてしまいました。なぜでしょうか？

理由はふたつ考えられます。ひとつは、自分が恐ろしくて足が進まない人間の町にどうして母ぎつねは可愛い子ぎつねを一人で行かせるのか、この点を児童が疑問に思うところと教育者がつまづいてしまうこととです。もうひとつは、従来の詰込み型教育への反省として平成14年から本格的に始まったいわゆる「ゆとり教育」により、国語の授業時間が減ってしまったことです。この時、夏目漱石の「坊ちゃん」や森鴎外の「高瀬舟」もほとんどの教科書から消え、新聞などで話題になりました。



こうして一旦は姿を消してしまった「手ぶくろを買いに」ですが、すぐに平成17年の改訂で東京書籍の教科書に復活しました。現在は新規参入の三省堂も加わり、2社が採用しています。

東京書籍の話では、「手ぶくろを買いに」が消えた際、これを惜しむ声が現場の教師から多く寄せられたそうです。「子どもたちに良い文学を読ませたい」という教師の思いが教科書会社を動かしたといえます。



光村図書 昭和55年度版 絵・小野千世

いつでもどこでも
スマホで「はんだ市報」が読める!!

無料アプリ「マチイロ（旧i広報紙）」を使うと、はんだ市報がスマホで読めます。また、最新号が自動で端末に届きます。ぜひご利用ください。

ご利用方法

専用のアプリをダウンロードして、簡単な個人設定をするだけで、すぐにはんだ市報を読むことができます。

「マチイロ」のダウンロード（無料）

- iPhone(アイフォン)の場合 アップストア APP Storeから「マチイロ」と検索
- Android(アンドロイド)の場合 グーグルプレイ Google Playから「マチイロ」と検索

※利用時のパケット通信料や回線使用料は利用者の負担となります。
※アプリ内に広告が表示されますが、その内容に市は一切責任を負いません。

【問い合わせ】企画課 ☎84-0603



「QRコード」からも接続できます。

